太棹

發展號

昭和五年十月十五日印刷納本
昭和五年十月十七日發行
（毎月一回一日發行）

小川文雄（虚舟）氏逝くを悼む

本誌主筆小川虚舟氏は、去る七日夜發病、藥石効なく遂ひに九日正午十二時永眠されました、餘りに唐突で夢のやうであります。

同氏は、九月號から執筆され「大阪文樂一座を聽く」の一文は、斯界の通をしてアッと言はしめ、前途多大の期待をうけたのですが、誠に痛ましき限りであります。

十一日の告別式には、左記舊友の方々が　　き合ひ聞き合はされて、互に暗然として見えられました。

澤田牛麿、松浦善助、島田俊雄、嚴本善治、荒木忠勇、大河内得一、岩佐銈、大杉茂生、鈴木重彦、松井淳平、志田勝民、西村達夫、近藤陽三、堺頼吉、赤尾藤三郎、宮村五兵衛、間根山忠義、渡邊仁三、眞田和彦、雁本昇邦、黒田越郎の諸氏

追而本葬は氏の郷里名古屋に於て執行さるゝ事になりました。

昭和五年十月十二日

太棹社

富取壽鹿

◆追悼號發行に就て

（二十一頁を御參照下さい）

本邦唯一の義太夫雜誌　太棹　十月號目次　（昭和五年十月十七日發行）

▼寫眞――東都聲義會の人々・三井篁鳳氏・湯原清司氏・宮本武藏氏

◆餘白の力……（絶筆）……小川虚舟（一）

□蛙の戯言……小泉蛙鳴（三）

■義太神樂……中野三允（六）

□音女會評判記……問者 芳河士　答者 虚舟 さく子（八）

■錦粧軒川柳……阪井久良岐（三）

◆東都聲義會採点表……（一五）

□東都聲義會（評）……井上驢胖（一六）

◇質問欄……響阿彌（一九）

◆太棹俳壇……芳河士潤（三〇）

◇大會と小會（評）……井上驢胖（三一）

◆讀者の聲……（三三）

□讀者諸君は同時に我が社友である……富取主幹（一六）

◆逸話集……芋虫爺（一四）

◇緊急社告……（一七）

□加賀見山舊錦繪……容楊黛（一八）

◇追悼號發行に就て……富取壽鹿（二一）

■本社主催淨曲大會……小島三喜子（二三）

◇自分の義太夫を自分で聞け……（二四）

□會報……五十義會主催追善義太夫大會・聲友會大會・東都五十義會・かな文字會・五聲會・語樂會・素絃會・竹韻會・團の字會・民造追善會・めばえ會・人形入團の字會・人形會　三四

◆十月・十一月の行事……（八）

◇十一月の運勢……納音生（三二）

◆消息・寄贈新刊……（三七）

◆耳の病は秋が起り易い時……ドクトル山路久道（一四）

旅館料理
下戸庵
美登利
大井町海岸
電話大森二四六四一八

羽田名物
香水風呂御料理
羽田穴守
久の家
電話羽田八番

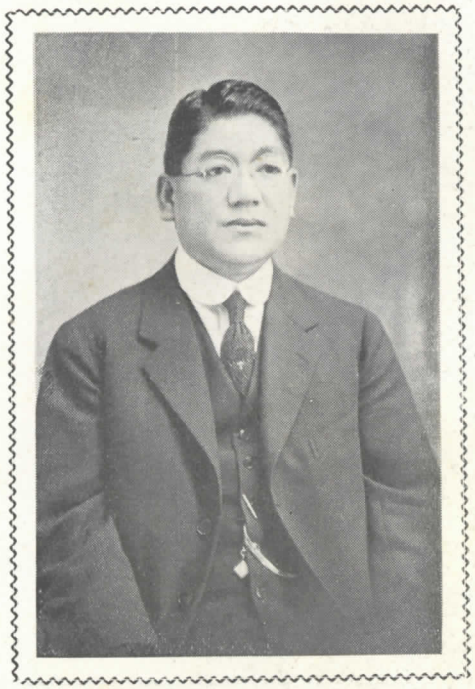
黒川叶

東都聲義會の人々

寫眞――前列向て右より榎本清福・湯原清司・竹内たもつ・飯田五聲
立松立昇・山田壽瓢・秋本雲雀の諸氏
中列向て右より倉田常盤・井上和風・關圓昇・杉山語樂
後列は鶴澤絃平・豐竹巴磨太夫・豐澤猿藏・豐澤猿二郎・紺我笑・大石貴酬・黒川叶・關悅子の諸氏

祝發展

三井篁鳳



篁鳳氏は、明治廿五年十七歳の時より義太夫に志し、竹本淡路太夫（故）、竹本時太夫（故）、野澤吉松（故）、鶴澤花男（現勇造）、豊澤團平（故）、鶴澤鶴太郎（現叶）、竹本富太夫（現駒太夫）、鶴澤友次郎、鶴澤豊造（故）、豊澤猿之助、鶴澤重造（現重太郎）等に師事され現在は鶴澤重太郎に就て其の至藝を究めてゐる。

本年六月東都五十義會々長に就任し、又一方文樂會を組織して、益々斯界にその神髄を發揮しつゝある。

主なる語り物は新口、妻八、酒屋、鳴戸、夕霧、お七、堀川、大文字屋、戀十、中將姫、先代、廿四孝、神崎、太十、市若、忠九。

祝發展

湯原清司

大正三年頃商用にて大阪に赴き、文樂座見物の際、津太夫の菅四、其他加賀見山、本下等を聽き、義太夫の名文章と音曲の司を知つて斯道に志したのは我が湯原清司氏である。

今夏、やまと新聞主催東都素義十傑人氣投票には忽ち五等に當選し、而して氏は東都聲義會の理事にして、今秋の大會に二三の理事が不出演を申し出たるに、持前の江戸つ子氣質を發揮し、奮然陣頭に立つて日夜盡瘁し、その努力は遂に同會創立以來の大會を見るに至らしめた。

豊澤雛助、鶴澤紘平に師事し、菅四、太十、安達、忠六等は、語り物中の語り物である。

祝發展

中澤巴

祝發展

宮本武藏

武藏氏は、昭和三年十一月より竹本播代に就て太十、忠六、日吉を學び、四年七月より豊澤團市に師事して、寺小屋、妙心寺、陣屋等熱心な稽古を續け、其の練磨空しからず、今春第十四回東都五十義會並に第六回東都聲義會、兩々相前後して入賞の榮譽を擔ひ、又今夏、やまと新聞社主催素義十傑の一人となり、前途大いに囑望されてゐる。

祝　發　展

安藤ごくろ

祝　發　展

竹内喜久子

竹内たもつ

祝　發　展

栗

生

豊

洲

祝　發　展

金

田

金

鳳

祝　發　展

紺　我　笑

武　笠　吉　樂

祝　發　展

小　澤　靜

近藤すみれ

麹町區土手三番町一九
電話九段二七一六番

朝見會

奥村喜樂

府下品川町北品川宿二二五
電話高輪二六番

竹本朝見太夫

府下品川町北品川宿六一

祝發展

黑柳

柳

拾月　太棹　第拾八號

餘白の力

虛舟

伊藤博文公の面前で二三の人が橋本書伯の大幅を展げで、批評をして居ると公爵が「お前達に雅邦の書が解るものか、その餘白の力の偉大さは視へまい」と言ふたことがある。

我が國の美術、藝術は悉く畫に於ける餘白の如きものに力が籠つて居る、義太夫の語りでも、絃でも、大切なは所謂「餘白の力」である。

菅四が十八番の素義の大家が、丸一段語り了つて後、早速批評せよとのことであつたが、「松王の引込の時、湯を呑むようでは」と申すと、「そんな枝葉に亘る處は己めて詞に力の籠つた處を評して下さい」との註文であつたが、土臺が据つて居ないのに批判の家は建てやうがないので、哄笑一番の後、鷄の聲色もどきに「好結構々々」一点張で、遁を打つた。……

「玄蕃は舘へ、松王は籠に搖られて、立歸る」トントントンとなり、次の絃に掛る迄は息を切つてはならぬ、見送られる籠の内には、吾が子を故主の身代りに立て、自ら其首の實檢を了へて、歸路にある人が居る、一方其乘物を見送るは、對手が僞首を本物として受入れ呉れ、血の雨降らさず濟んだを意外の思で居る浪人夫婦である、其感概や無量、「少女は語らず、花物言はず、英雄の心緒亂れて麻の如し」と謂

つた風な伸氣なことではない、トントントンの間、息を詰めて無言で、正面を睨んだのみ、其間、千萬の言を弄したよりも雄辯に語つて、多大の感動を聽衆に起さしめる、茲まで語つて來たのは此無言の雄辯を齎らす爲に過ぎないのである、その大切な餘白を塗たり汚したりするは……さあ事だ、下女刺身まで煮てしまい……である。

數日前響阿彌老の談には、杉山茂丸大人が清六師に向ひ

「撥數をかけるから尙淋しいのだ」

と言はれたとか、之は貴い敎訓で、賢明なる我が讀者諸君は已に今申した意味から御推了の事とは思へど、尙鮮明にすべく次の逸話を挿むと致そう。

英國の富豪の娘が單獨で日本の美術研究に遣つて來て、先づ日光の日本旅館に滯つた、十五疊の部屋の眞中に坐つては見たものゝ、何んとなく手持無沙汰、殊に部屋の中に何んにもない、物足りないこと夥しい、乃で召使に云付けて大鞄を持込ませ、色々の物を取出して展覽會よろしくと列らべ立てた、居る數日、何うも坐敷の調子が付かぬと心付き、一つ去り、二つ去り、終に凡べてを仕舞込んで了つて、偖て氣を靜めて室內を見廻せば、床にかけたる掛物、其前に据へたる生花、それが空虛の室と調和して、其賑しきこと得も言はれず、始めて、虛、虛ならず、實、實たらずてふ哲理が解つて、乃で生花の稽古に沒頭して、其眞味を嘗め得らるゝ樣になつた、通辯から「花を植けるのだから生花と申す」のだと聞いた翌日、古木が活けられたので、扨て其解釋に困つたと彼女の日記に記された。

□□□蛙の戲言□□□

小泉蛙鳴

はしがき

義太夫とは何ぞ？　てふ問題に呻吟せる筆者には八月の東京劇場に於ける文樂座義太夫一座の素淨るり興行は絕好の研究對象であつた。此の好機を逸してはと稀有の猛暑を犯して十日間皆出席のレコードを作り、心魂を籠めて傾聽した。その結果、漸く義太夫の概念を把握する事が出來たが、生來頑健ならざる筆者故、六日目の夜なぞ、餘りの暑さに卒倒しそうになり、仁丹を嚙んで辛うじてその難を避け得たほど、かなり苦痛であつた。然しその苦業の裡にも、筆舌に盡せぬ悅樂を感受した事も亦、否めない事實である。それで此の十日間の體驗を何かに纏めたいと切望し乍ら、健康を害した爲め遂に機を逸して仕舞つた事を返す〳〵も口惜しく思つた。然しその儘捨てるに忍びざるものもあるので、月遲れの腐つた材料を素にかゝる戲言を連ねた次第である。

太棹の魅力

人形の型の研究から淨るりを究める必要を感じ、玄、素の區別無く寸暇を利しては義太夫會を聽き廻るようになり、果ては太棹の音色に底知れぬ魅力を感ずるに至つた。そして最近では太棹の寫實音に深甚なる興味を懷き、「あの撥音は何を意味するか」「此の詞章を太棹が如何に描寫するか」といふ二つの方面から太棹を傾聽してゐるが、今迄氣の付かなかつた演奏者の苦心なども會得されて、益々太棹の魅力に吸着されて行くばかりである。

八月の東劇に於ても每夜新しき發見に狂喜したが、その中から一例を引證すれば、「增補朝顏話宿屋の段」中「云ふは仔細の有るぞとも知らぬ佛氣德右衞門、尻輕にこそ立つて行く」の一節で語る古靱太夫氏は德右衞門が駒澤次郎左衞門の賴みを聞くと直ちに朝顏を呼びに立つ實直な亭主を表現すると、共演の清六氏の絃は氣輕く引受けても德右衞門もかなりの老爺であるから立つのにウント腰を伸してから步み去る姿を如實に描く至妙なる撥音を奏したので、思はず「巧いなあ！」の嘆聲を洩した。

此の德右衞門の老爺振りを示すに適當なるも一つの挿話を附加するが、昨年義太夫人形座で朝顏日記の通しが上演された際、玉藏といふ老人が德右衞門の人形を遣つたが、德右衞門が庭石傳ひに來て、奧座敷へ上るのに、椽側の柱に片手をかけてから上るのを觀た時、一寸した仕草だが巧い演技だと感心させられた事がある。

風流 太閤の 金ぷら茶漬

新橋驛前食傷新道
電話銀座五〇四三番
（美地句）

閑話休題「尻輕に」の絃が餘りにも印象に殘つたので千秋樂の夜、淸六氏に逢つた時、その話をすると、我が意を得たりといふ悅びを面に現はしつゝ、次の如き意味の言葉を强調された。

『あの「尻輕にこそ立つて行く」と前の「小腰屈めて入り來れば」は宿屋の內でも非常に六ケ敷い所です。どんなに心で老人の氣持を現はそうと思つてもなか〳〵撥が思ふように動かないので、巧く行かない時は一日不愉快ですし、反對に思ふ通りに彈けた時は床の上で躍上りたい位に嬉しく思ひます

一體、義太夫の三味線はどの撥音でも皆んな意味があるが總べての撥に意味を籠めて彈かうとすると恐しくて一撥も彈けません。それでつい型通りに彈いて仕舞ふ事が多いのです又、全然寫實に依つて彈くとお客樣が眠つて仕舞ふ個處がありますから或る程度迄嘘を加へねばなりません。この嘘と實との糾ひ交ぜの具合が六ケ敷い點で、何十年三味線を彈いても之で完全といふ域には到達しません。何處迄行けば良いのか底が知れない藝ですから結局一生修業に終るんですね。』

至妙なる哉太棹よ！
至難なる哉太棹よ！

心の糧としての義太夫

鐘が鳴るかや撞木が鳴るか
鐘と撞木の間（あい）か鳴る

といふ禪の眞諦を說いた和歌を精神學界の權威森田正馬博士は

鐘が鳴るかや撞木が鳴るか
撞木當れば鐘が鳴る

と訂正して居られる。

義太夫の眞諦を鐘と撞木の間に求めんとして愚かなる苦悶を續けてゐた筆者の腦裡に、東劇の素淨るり八日目の夜、ふと「撞木當れば鐘が鳴る」の一句が閃いた。と同時に今迄重苦しく感じてゐた肩が急に輕くなり、何んとなく精神が爽快になるを覺えた。

義太夫に對して藝術を求める人には義太夫は藝術であり、娛樂の爲めに義太夫を聽く人には義太夫は娛樂であり、義太夫を宗敎と觀ずる人には義太夫は宗敎である。

求めに應じて變化はするが結局、「義太夫とは淋しさの友であり、心の糧である」の一語が永い間の苦悶に依つて筆者が握つた解決の鍵である。

娘義太夫に夢中になる人や、美音で唄ふさわりにのみ拍手喝采する人を輕侮の眼で眺め、唯々研究一點張りで押通した之迄の筆者は、確かに義太夫の精神的方面のみを觀て、他の肉體的の半面の觀察を怠つてゐたのである。

假りに義太夫を宗敎に譬へるならば、その信者は、經典の檢索至らぬ隅無く、僧侶も及ばぬ博識から、宗敎の何んたるかを解せず、否、解しようとも思はず、唯夢中に信仰してゐる所謂有難屋に至る迄、その間千差萬別である。

時代物を好きな人は時代物を採り、世話物を好む人は世話物を選み、笑ひたい人はチャリ場を愛し、泣きたい人は愁歎場を望み、エロチックの人は艶物に心ときめかす。

斯く觀じ來れば義太夫の効德亦威大なるかなである。

從つて、近來義太夫の不振を歎き、義太夫の文章に表現されたる仁義忠孝の思想を以て現在の思想惡化救濟法として義太夫の宣傳に大聲叱呼してゐる人々を見聞するが、義太夫とはそんな狹いものでは無いと思ふ。仁義忠孝勿論結構、之に反對する氣は毛頭無いが、レヴュー全盛時代のモボ、モガに聞いても解らず、讀むに面倒臭い義太夫節の文章に現はれた思想を第一義に說くより、泣きたくても涙の出ぬ時にはその啜り泣く如き哀調に依つてさん然たる涙を誘ひ、意氣悄沈せる際には腸の捻轉を感じさせる位、力の籠つた撥音に依つて潑溂たる元氣を湧出せしめる義太夫節獨特の至高至深なる節奏の魅力を高唱する方が遙かに効果的であると思ふ。

蛙鳴は甘之に通ずる故、甘い野郎と嘲笑されるかも知れないが筆者は敢えて叫ぶ。

心の糧としての義太夫は絕體に不滅なりと。未だ書きたい事も多いが餘り長くなるから他日に讓り、最後に筆者の義太夫節に對する今後の態度を言明して擱筆しよう。

義太夫節の文章の生命を最も正確に表現する演出者を探しその至藝に接して魂の洗濯がしたいと切望して止まない。

（長月極日記）

義太神樂

中野三允

再び本田仙太郎君に合掌す

太十章句改訂の卑見を發表した中に本田仙太郎君に合掌したものがあつたが、同君が東京日日（五、七、二九）に發表したものに

日蓮大聖人の
勤王の權化、愛國の結晶、知恩報恩御孝行の極致にましまし、一天四海皆歸妙法の世界的大慈平等の御誓願「世界とは日本國なり」との絶大なる國體精神の御宣揚「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」との御願業「我れ控ふればこそ日本國は安穩にありつれ」との御信念
「隱岐の法皇は天子なり、權の太夫殿は民ぞかし」「それ日本は神國なれば神は非禮をうけたまはず」と北條氏を大喝叱咤、大義名分を御闡明遊ばされし御氣魄、「一切衆生の一切の苦を受くるは悉く是れ
「日蓮一人が苦と申すべし」
「日蓮は泣かねども涙ひまなし」との御情操、千秋の下儒夫をして起たしむべき止暇斷眠の難行苦行に御終始遊ばされし聖生涯を以て大地上に
法華經を御實證遊ばされし
南無妙法蓮華經を信仰し奉るこそ、此の意氣消沈せる全國民に對する靈の注射藥となり、精神的殺菌劑となりて感奮興起を興へ英氣を煥發せしめ、一波萬波、圓融相關の理により、物心兩つながら併せて鬱勃たる興國の氣運を長養し殊に世界に比類なき
皇室尊崇の至誠勃興するが故に叙上の凡ゆる國患を打開すべき唯一最尊の最好良藥には非ざるか。
とあるのを見て再び仙太郎君に合掌する。足下が太十にある「北條義時」云々を知て居るか何うか、知らずとすれば姑く措く、万一知て之を放任するに於ては、
「隱岐の法皇は天子なり、權の太夫殿は民ぞかし」「それ日本は神國なれば神は非禮をうけたまはず」と北條氏を大喝叱咤、大義名分を御闡明遊ばされし御氣魄
と渴仰する日蓮大聖人に對し、足下は何の顏あつて見えんとするか、敢て足下の辯を聽かんとするものである、曾て外骨は足下の名仙太郎を俗太郎と呼び做した、余は其由來する處を知らないから、今直に外骨に左擔はしないが、足下にして太十の章句を知り而かも尙默々に附するに於ては、俗太郎、惡太郎、賊太郎……世界にありとあらゆる醜穢なる名前を列ぬるも尙足らざるを思ふのだ、如何……因に「太十章句改訂」の卑見の揭げられた「太棹」は仙太郎君の住所不明のため、太棹社から送らなかつたさうだが、たしか府下大井の不入斗に居るらしいから、今度は届くであらう。

越喜美の太十

初めて越喜美の太十を聽く、否初めて越喜美の顏を見、初めて越喜美の聲に接した、昭和五年七月二十七日、日本橋茅場町の清水ホールに開かれた歌聲會で……糸は清一であつたが、語り出しからして之れは本格だなと感じた、終りまでシツカリして實によかつた、此調子で飽まで稽古を怠らなければ、前途甚だ有望である、勿論彼の「習ひとをぼし分られて」を「をぼしめし」とやつたり「不義の富貴はうかべる雲」を「うかえる」など〻惡い癖を出すタレ義太のヨタ稽古とは斷然超越振を發揮して居る、吳々も望ましきは評判の好いのに滿足して、一層の精進を怠つてはならぬことだ。

次には例の北條義時のところを何う語るかと待構へて居たが、前のところできつてしまつたので聽く機會を得なかつたが、誰か越喜美に注意してやつて貰ひたいと思ふのだ。誰でも早く改めたものが、結局先見の明があつたといふことになるのだから、氣のつかぬ内は兎も角も、ついたら直に改めるが勝ちである。

演藝通話會後援
くろご朗讀會（第十回）
時日　十月十九日正午十二時開場
會場　上野松坂屋ホール
一番目「父歸る」　一幕
中幕「義經千本櫻鮨屋」　一幕
講演「太皷の話」　田村西男
二番目「三人吉三廓買初」　二幕三場
▼招待券を差上ます、御申込下さい。
事務所　神田明神境内（開華樓内）
くろご朗讀會

第卅回

音女會評判記

語り物（九月廿日）――語順鑑引――

□壽式三番叟＝千歳（八重吉）翁（かきつ）三番（仲勇、桃太郎）三味線（富之助、仲吉、登女助、富千代、八重八、志磨吉、豊太郎）

□鳴戸巡禮歌＝（桃太郎、豊太郎）戀十（富花、富之助）橋本（八重八、登女助）鳴戸十郎兵衛内（かきつ、富千代）山名屋（八重吉、志磨吉）安達仲勇、仲吉）毛谷村（富之助、富千代）

□河庄＝治兵衛（かきつ）小春（富花）善六（八重吉）太兵衛（富之助）孫右衛門（八重八）三味線（登女助）

問者　甲芳河士
　　乙さく子
答者　丙虚舟

甲　批評を願ふ前に音女會に就て御感想が伺度いものです。

丙　時代の變遷や推移の恐ろしい事を此音女會で知りました、柳橋や新橋が花柳界の牛耳を握つて居たのは昨今の如うに思ふたに、早や衰へて今は十二階トが天下とは、所謂「四時の序、功を成すものは去る」の諺通りで太棹藝妓だけで之程迄に多士濟々たる會を立て得らるゝ千束町の隆盛は、素晴しいものですなア。

甲　東京中で是程の會はありません。

丙　そうでせう、それに絃も殆んど全く内輪の人である事は第一の誇でもあり、經濟でもあり、而して又會として最も意義あるものである。

甲　其誇あり意義ある會の催として出演された方々の藝評を願升。

丙　三番叟と切の掛合半分を聞洩らしたは申譯ないが、音女會を或方面へも吹聽したい爲に誘つた人々があつたので……

乙　「巡禮に御報謝」の時に「ハツト」なされたは、何か缺點でも有ましたか。

丙　女性は觀察が鋭い、僕の聞振を注意して居られたのですか。

乙　何んだか常と違つた御樣子でしたから。

丙　見現らわされた上は何をか包まんですが、實は意外に皮肉な語り口と思ふたからです。

乙　と申しますと。

丙　誰でも「ジユンレイ」に御報謝と申します、夫では阿波の國訛になりませぬ、巡禮は「ジユンレン」、幽靈は「ユウレン」と發音するがあの國の訛です、私の耳にふとそう聞へたのでおやつと思ましたが後で聞違と氣付ました。

甲　戀十は如何です。

丙　結構です、三吉が能く出來ました。

甲　毒舌の大家が譽めるのは氣味が惡るい。

丙　いや全く結構です、才氣喚發して萬事能く行届いて居ます。

甲　批評せよと音女會から眞面の申込がないから、輕く逃げなさるは御尤の如うですが、會の人達はもつと盛大にしたい熱心から、貴郎の評を待受けて居られるのです。

乙　富花さんの戀十とせず、廣く三吉子別に就ての御高說を伺度いもので

丙　之は八方攻ですな、素人の私に玄人の眞似をさせるは何の甲斐もない事です。

甲　其手は喰べませぬ。

乙

十月（大）

行事

▽茶家の爐開き（一日）▽朝鮮總督府始政記念日（一日）▽達磨忌（五日）▽神嘗祭（十七日）▽えびす講（二十日）▽池上本門寺お會式（十二日頃）▽菊供養（十三日）▽靖國神社大祭（廿三日）▽天長節（三十一日）

食品

▽柿・栗・柚子・人參・大根・芋・鰯・さんま・いな・あぢ・小鳥。

花卉

▽菊・うめもどき・みむらさき・木犀・風鳥草・つりふね草・みづひき・秋のきりん草・たでの花・葉鷄頭・みやまほとゝぎす・りんだう・あらせいとう・とりかぶと・コスモス・ダリヤ。

娯樂

▽菊見・紅葉狩・銃獵・釣・園藝・芝居・旅行・遠足・讀書・歌の會。

家事衛生

▽冬着の仕立・なるべく薄着に慣れるやうにすること・感冒の注意。

遊覽（東京近傍）

▽達磨忌（五日禪宗各寺）▽十夜法要（六日より十五日深川靈嚴寺・目黒祐天寺）▽お會式（八日より十三日池上本門寺・堀の内妙法寺）▽觀月（陰曆九月十三夜＝上野・高輪・芝浦・品川・羽田・大森・洲崎・愛宕山・九段・神田明神・湯島天神・綾瀨・隅田川・待乳山）▽湯島天神祭禮（十日）▽狩獵（十五日より翌年四月十五日迄＝多摩・秩父・土浦・印旛沼・浦賀・遠くは越後）▽べつたら市（十九日＝日本橋大傳馬町・旅籠町）▽蛭子講（二十日）▽菊見（二十日より十一月下旬）染井・入谷・三河島・喜樂園・麻布廣尾笑花園・淺草花屋敷・目黒華壇・芝公園苔香園▽紅葉（下旬）瀧の川・品川海晏寺・音羽護國寺・芝公園・上野公園・目黒不動山内・雜司ヶ谷・澁谷・十二社・井

甲ジャア已むを得ぬ、知つたか振りを發揮しませう、鳥渡人の氣の付かぬ所は、大勢の引込の處を間を持つと駄目で、其氣分が出ません、三吉の獨舞臺になつて「げようにに滑つて歩かれぬ」の「ぬ」が一本上らねばならぬ事は誰も承知であるが、「ぬ」の次に「う」の產字が出て來る、それが目立つては落第です、「くつみまつめて、腰に、つけ」此「つけ」を緊り下げる事が肝要です。

乙誰でも下げます。

丙其下げ方に意味がある所が味噌です「みすぼらしげのォーオ、後かげ」の後影も同じで、三吉の樣を目に見る如うに思はせる語振で有度い。

「……夜道には、腹が痛むと」の腹を甲に上げて、タレ義太式になつては味がない。

「養君御家の御恩、思はずば」では「御恩」と切つて、充分息を引いて大きく上で「思はずば」とせねばならぬ之も亦何の奇もない如うだが、茲が浮曲の第一要義である、凡べて教訓いい、となる所は悉く甲で大聲を出させていある、此處の「思はずば」は肝要用語である、其意味を体して語ると語らぬとは聞く側に大變な相違がある

乙も少し何か。

丙上總落しに掛る前に……

甲上總落しとは

丙太棹社の社長閣下が此質問は恐縮で

乙餘りいぢめないで下さい

丙ウフツ、助太刀が這入つては凹みます、菅四の切に「門火を頼み頼まるゝ」あれです。

「身を投伏して」の前に「式臺の段箱に」とある、あれは揚屋の「まつやアーまア」と同じ節で、聲がないとアノ段箱が云へません、お半女史さへ匙を投げた程です、富花孃は味く遣りましたよ。

乙貴郎も旨く逃げましたね。

丙之から先はチト端折ませうよ。

の頭公園・下總眞間・武州高尾山・上州妙義山・碓氷・日光・甲州御嶽・箱根▽栗飯（目黒）▽靖國神社祭禮（廿三日 ▽帝國美術院展覽會（中旬より 上野）

地方祭禮

▽一日豐榮神社（周防）七日赤間神社（長門）八日丹生川上神社上社（大和）田村神社（讃岐）諏訪神社（肥前）九日大神山神社（伯耆）物部神社（拓見）十日梨木神社（山城）若狹彦神社上社（若狹）金比羅神社（讃岐）十一日海神社（播磨）安仁神社（備前）大縣神社（尾張）十三日高良神社（筑後）十四日熊野神社（出雲）十五日太秦牛祭（京都）熊野速玉神社、伊太祁曾神社、（紀伊）酒列磯前神社（常陸）伊利神社（播磨）枚聞神社（薩摩）十八日長田神社（攝津）吉備津神社（備中）十九日忌部神社（阿波）二十日出石神社（但馬）二十一日二荒神社（下野）出雲神社（丹波）廿二日鞍馬火祭（京都）二十五日唐澤山神社（下野）二十六日宮崎神社（日向）二十八日臺灣神社（臺灣）照國神社（薩摩）二十九日香椎宮（筑前）

乙夫では双蝶々は。

丙あれを出す丈あつて詞は繫石に乾て居ます、けれども到達せぬ間に之を語るには多少不利です。

甲鳴門の奥は如何。

丙赤晒染に、中形か」を兩方時代で言ふては、湯も茶も煮へる、前に時代で出て、中形か」を世話に碎ける又は他の趣向をせねば場合に適せぬいいいいいいけれども段切の南無阿彌陀佛は旨い

乙明烏は何んなもので……。

丙女義には無理な註文なれど、慾を言へば「雪は未だ」の邊がモット研究され、お辰が云へる樣にならねば山名屋は出さぬが良い。

乙お辰は出來てた如うでしたが……

丙律子のお辰位に聞きましたか。

甲ソロ〳〵名句が出掛ましたネ。

丙それに又おかやが早や二階へ上つて居て障子の外で浦里を呼びましたネ。

甲成程ネー。

丙處がおかやが浦里を引立てる所も良し、送りから先き申分なく、感心しました。

乙安達原は。

丙之も亦結構です。

乙日光を見ない先から結構ばかり仰言つては困り舛。

丙よう、遣りましたね、實は餘り申度くない、と申すは、一間へ直ぼす白梅」の處一ト撥で、早や切腹と云ふ段取になつて居ねばならぬ約束の型がある、語りも組太夫の如うなものでなければ迚も問題にならぬ事がある、仲勇、仲吉兩女史は共に上乘の出來であつたが、生れが極上と行かぬから、努力の割に聞く方に興が湧かぬを殘念に思ふた。

甲扨て毛谷村は……。

丙結構でした。

乙月並は拔になさつて……。

丙六助が山がつらしい詞遣で結構でした。

十一月（小）

行事

▽西の市▽去來忌（二日）▽明治節（三日）▽鞴祭（八日）▽爐開き（八日）▽陸軍大演習（十月末より十一月中旬まで）▽七五三の祝（十五日）▽大師講（廿一日）▽近松忌（廿一日）新嘗祭（廿三日）滿期兵除隊（下旬）。

食品

▽はうれん草・くわゐ・松露・大根・葱・海苔・伊勢海老・かじか・むつ・目鯛・鱈・ぶり・鮪・鴨・牡蠣・りんご。

花卉

▽山茶花・つげき・茶の花・菊・雁來紅・扶桑木・サルビア・コリウス・アゲラタム。

娯樂

▽紅葉狩・銃獵・酉の市・釣・園藝・芝居・小春の散歩・温泉・避寒。

家事衞生

▽寒中衞生のいろ〳〵・火の用心・感冒の豫防。

乙も少ー缺點見の本家を發揮して下さい。

丙少々申そう、繫石に音女會の眞だけあつて結構で、立派な藝だが、故團藏の苦心談を申上度い、六代目が古靱の野崎や沼津を聞いてお光や重兵衛を演じた如うに、渠も六助に就ては義太夫の研究を怠らなかつた、追放の命を受けても動かぬお園に組子が取掛る、之をトタンの間拍子で投付ける、乃で衣川彌三左衛門が手槍を取つて突掛るを小腕で喰留め、卷落す、手の内見たと殿樣が現はれて仇討を許す、こと程左樣に武術に達せるお園は仙石權兵衛の落胤たるに耻ぢぬ强者である、其お園の斬込む切先は鈍いので六助は持餘の體である、玩具の太鼓と撥を手にー乍ら身構宜しく、譯を話す間も油斷がない其息遣、詞遣に切込む隙がない、お園に「女房さんがあるかへ」と問はれて、之れぞ誘の奥の手と尙更油斷のない返答をした、併し「樣子あつて持ませぬ」と云ふ餘裕が見出されぬので、唯單に早口に「持ちませぬ」と投げる如うに言つて退けた、眞に迫つた仕打である。

乙お園の名乘が濟んだ後の六助は如何

丙「御老體の事なれば」の邊已に一味齋の變死を知つて居るのではない乎と思はれた。

甲成程。

丙「園は取分悲さの遣瀨涙の」で少々泣いて「エ、エ、口說言」となつたあの「エ、エ」は取去るが良からう、津賀さん程の名人が逆櫓で之に類した曲を演じたが、寧ろないが優と思ふ、最初に轉づる鳥の邊、中頃杣夫の物語、段切等に就て專門家の八釜敷い論もあるが、我が富之助女史は義太夫は達者なものだ、女性にして之だけ語れるとは驚嘆の外はない、加ふるに文久大人なんど斯技の大家が控へて居る音女會は大江戸名物の一たるを辱かしめぬと申ーて可なりであらう

遊覽（東京近傍）

▽紅葉＝王子・瀧の川・音羽護國寺・遠くは碓氷・日光・箱根▽七五三の祝（五、六、七日）日枝・神田・氷川・富岡八幡・大鳥神社・其他各社▽酉の市（酉の日）下谷龍泉寺町深川公園・向島秋葉神社・四谷須賀神社・新宿華園神社▽報恩講（廿二日より廿八日まで）淺草東本願寺・築地西本願寺。

地方祭禮

▽一日大麻比古神社（阿波）三日明治神宮（武藏）神農祭（京都）四日淺間神社（駿河）五日都農神社（日向）八日火焚祭（京野伏見）九日住吉神社（壹岐）十五日法華寺會式（下總中山）宗像神社（筑前）十七日談山神社（大和）廿七日千體荒神祭（武藏品川）

十一月異名

霜月・神樂月・霜降月（倭）
仲秋・辜月・復月・黃鐘（漢）

□□錦粧軒川柳□□

——阪井久良岐——

川柳二三子と銀座裏に酌む

銀ぶらの裏は「おでんでやつちよろか」

□註＝「やつちよろか」は丸橋忠彌劇の白ふ噂

又しても七十五日小五月蠅い

佃島某社を訪ふて冷遇さる蓋ー佃島五世川柳來狂句の本場なり

川柳家佃へ來ると僞にされ

向島百花園

秋草へ石碑を配ばる百花園

同乃木將軍籌の梅

百花園乃木將軍も一ト役者

秋興

芋堀の里はありけり栗拾ひ

□註＝芋堀競爭今や進んで栗拾ひに及ぶ

國技館

可笑しさはレビューの元祖菊人形

國技館吉野を出ると那智の瀧

團參と一所になつて菊人形

菊人形見てゐる內は愚痴も出ず

菊人形時代放れの氣持がし

逸話集

芋虫爺

名古屋の名物男に高木の鍬公と云ふが有つて大正の中頃迄生きて居た、元は酒問屋の主人であつたが、至つて通人である處から、相當の資産を烟にした、果ては太夫元の代理となり、大物が乘込めば必ず此男の手にかゝる、夫故越路、大隅は勿論、雁治郎、延若等皆此名物男の親交がある、先代雀右衛門は溫泉へ渠を伴ふ時は必ず渠の紘で語つたものだ、聽衆は役者と心付かず文樂の太夫と思込んで幾多のナンセンスを演じた。

彼に金氣のあつた時分には各方面の人々を養つた、碁では山崎五段を連れて夫を己が弟子分として京都の旅館へ宿込んだ、宿屋の亭主が初段である、山崎五段と互格で打たせて傍觀し乍ら山崎の一手々々を愚手だと罵る、山崎は門弟氣取で一々叩頭平身する、けれ共亭主の石は立たぬ、メチャ〳〵にやられる、鍬公は高慢面して山崎の緩手は見て居られぬから代つて自分が打たうと言出せば、亭主はまだ此上の强敵が現はれてはと遁出す、跡見送つて兩人は抱腹絶倒した。

その手を擊劍に用ゐたが、そうは問屋で卸さぬ名古屋に良い劍術師範が居た、其門弟に鬼熊と掉名された向見ずの豪の者がある、其者に常々師匠から「高木は乃公よりも一枚上の使い手」だと言はせてある、或日彼が廣小路通り朝日神社の前へ來ると人だかりだ、何事ならんと群衆押分け内へ入れば、平身低頭して詫ひる町人を睨付けて威高々に鬼熊が力身んで居る、人々は喧嘩好の鬼熊と知つて居るので、町人を不憫とは思へず、誰一人口を利く者がない、其時高木の鍬公割つて入り、

高木「之れ鬼熊、汝も人に鬼と言はれる身なら、モット骨のある奴を對手にせい、サア乃公に向つて來い」

鬼熊「ヘイ」

高木「ヘイジャない、竹刀持つ手がきまらぬ先から爭論は止めろ、貴樣は質が良いそうだから、チト教へてやらう、宅へ來い」

鬼熊「アノ教へて戴けますか」

高木「見込がありそうだ、來るが可い」

鬼熊「難有う御座い舛」

之で此場は治まつた、群衆は諦れて「上には上があるものだ」とさゝめき合ふて散つた、年が改まり門松の色も青々と目出度い春が來た、スルと鍬公の店先へ、竹刀の先へ稽古道具を括附け、夫を肩にかけて入込んだは餘人でない、約を履んで鬼熊が年の改まるを待ちわびて、稽古して貰ひに來たのである。

百雷の轟く如き大聲で訪へば、高木一家は豫ねて神明前の出來事は聞いて居り、それが事實となつて來たのである、熊の一擊に逢へば忽ちあの世のものとなるは必定、其上アレが僞りと知れたなら何うなる事かと案ずる内、二度目の呶聲に一同青くなつたは無理はない、鍬公は平氣を粧ふて自ら店先に立出で、叱聲一番

高木「ヤイ熊!!」

鬼熊「ヘイ」

高木「今日を何日と心得て來たか、正月の元日から稽古に來る無禮者、モウ弟子にはせぬぞ、歸れ」

鬼熊「ヘイ」

と一ト聲、青菜に鹽の體で鬼熊は引返へす、跡見送つて腎餅ついたは我が高木の鍬公閣下である。

鼻の病氣は 秋が起り易い時

ドクトル 山路久道氏談

人間の耳や鼻は五體を巡つてゐる神經の内でも末梢神經に屬するもので、日常生活上一番外界との交渉の多いものですから、直ぐこの病氣に罹り易く、その中でもこれから秋深くなるに從つて多くなるのは鼻炎であります、急性或ひは慢性の蓄膿症は皆この鼻炎が原因となるのです、これは鼻腔内の畸形のため呼吸氣流の障害を起す關係がその根本です、普通この種の病氣であれば、その鼻症の形態を元通りに直しさへすると、如何なる難症も治癒するのです、が急性の場合は別に醫師の治療をうけなくとも寒い風に當らず、埃ッぽい空氣を吸はず酒、煙草を攝らずに、養生だけでも容易に癒ることがあります、蓄膿症に罹ると本人自身も呼吸に差支へて不快を覺ゆるのですがその鼻の中の膿汁が外へ排出せられないため、夜眠つてゐる時などには極めて少しづゝではあるけれども、次第に食道管を經て胃へ流れ込むのです、それが長い間には相當の膿汁が胃に吸收され胃腸の粘膜を脅かすことゝなるのです、かくて、色々の神經機能をそこなふ樣になり、神經衰弱になるのです、蓄膿症は影響が廣いので、常に多くの榮養分をとつて、充分に燃燒させねばならぬこと、また酸素の缺乏が鼻神經衰弱を起して蓄膿症となりますから、豫めこれに對抗するだけの丈夫な身體を作つておくべきです、鼻は單に嗅覺、呼吸のみのものでなく音聲を發する補助機關となるため、聲をつかふ人は殊更丈夫な、健康な鼻が必要となる譯です、鼻の惡い人と、いゝ人とは單にそれだけの理由で、可成りの幸・不幸が出來るわけで、いくらいゝ匂ひの紅茶を飲んでも、鼻がきかなければ、何にもならないわけで、それだけ世界が狹いのです、で、鼻疾についての注意としましては

(一)榮養分をとり、運動をなし、身體を健康狀態におくこと。(二)常に風を引かぬ樣にすること。(三)風を引いた時にはアスピリンを〇、五瓦位一回に飲み、横臥して發汗させる。(四)外出にはマスク。(五)蓄膿症と氣づいた時は、直ちに醫師の診察をうけ、酒煙草などの刺戟物を避け過激な運動をせぬこと。

讀者諸君は同時に我が社友である

再記　富取主幹

太棹は皆樣の雜誌です、皆樣の通信機關であります、皆樣の相談對手たり、忠僕たり、師範たり、門弟たり、友人たりであります。

スピート時代に最も必要あるものは完備せる通信機關を有つことです。長髪賊が起つた時香港附近の居留民が一隊となつて、本國の救が來る迄立籠り、烏合の衆であり乍ら能く防戰して、終に有利な結果を齎したは、支那軍に屬する者は各の立場が何らの、分が何うであるか、毫末も知つて居ない、之に引換へ居留民は通信機關があるので、何んとしても本國の兵が來るまでは現場を維持せねばならぬことや、各自の立場を理解して居た、夫故志を一にして防戰することも、善處することも出來た。

今は平和の戰爭で而かも激甚である、之に應戰し善處するには矢張通信機關を有ち、夫を利用することが第一の急務である。

我が太棹は人間の趣味性を滿たしつゝ人道を皷吹する傍、皆樣の通信機關を以て任せんとするので有舛、夫故我が太棹の讀者諸君は同時に社友で有舛。

社友の特權と福音

太棹には相談部の設があり舛、社友は何んでも相談し得る權利が有舛。

相談部は
醫術に關する件
法律に關する件
靈術に關する件
觀相に關する件
圍碁に關する件
土地に關する件
海外に關する件
貿易に關する件
金融に關する件
其他百般の事項

を夫々專門の大家名士の意見に徵して御相談申上舛。

○社友は義太夫に關する質問が出來舛。

○社友にして義太夫を語らるゝ場合は場所の撰定等の御世話を致します。

○太棹の發行誌數は未だ誇るに足りませぬ、けれども普及の範圍の廣きことは自慢が出來ます、即ち世界到る處の居留邦人に發送して有舛から、互に利益の交換をなさるには至つて重寶です。邦文で海外に廣告して効目ある我が太棹が古今內外を通じて唯一獨步であります。

○廣告は社友は半額です。

○海外と取引なさるには邦人を相手でない時は經費が嵩みます、而して失敗が多いのです、之は本社で御話して差上舛、實費以外は不要せぬ。

○社友が內地は勿論海外へ旅行なさる時は旅先の社友へ御紹介の勞を取り舛。

○社友で旅館を業とせらるゝ場合は喜んで社友を特待致され舛。

○其他の業を營む向も亦同じ。

○社友章御入用の方は實費にて徵章を差上舛。

○義太夫の興行は玄人素人に拘らず御申込に應じて斡旋致舛。

○社友の義太夫の御批評を致舛、申込下さい。

緊急の社告

海外の社友諸君へ

遠く母國を去つて海の外に居ます我が社友諸君は、母國との聯鎖が充分でないのを常に遺憾と思はるゝであらう、爲替を組むにも外國の銀行を經ればならぬ、取引するにも外商の手を煩はさればならぬ、其處に不便不利がある、それや之れやを思つて我が太棹社は海外在住の方々と內地との聯鎖たらんと企てました、內地と海外とのみならず世界何れの港とも心强い聯鎖の役目を果すべく設備しました、國際汽船會社の船は世界到る處の港へ參り升、日の丸の國旗を揚げた船が地球上あらゆる處を航海して居ます、けれども小資本の取引は己が本國との取引でも外人の手を藉りねばならぬのは不利で不便です、その缺點を補ふべく本社は陣頭に立ち利得の問題をはなれて凡べての御世話をする役廻をいたさんと志しました、皆樣は之を御利用下さい、親族知人の行方不明や、結婚問題や、問合せ取調等何んな小さな事でも喜んで致升、年極の愛讀者は直ちに我が大切な社友であり升から其社友の仰付は忠實に勤めます。

（皆樣の投書、報告等を歡迎ー升）

內地の社友諸君へ

我が太棹社は已に破天荒な企をしました、世界各國の港百九十二ヶ所は已に日本の國旗を飜した汽船が往來して居ます、其處に住む邦人の手には我が太棹誌が渡つて居ます。

本社は始めの計畫では我が愛讀者諸君の爲に廉買組合の方法でお安い日常品を供給して差上げんとしたのです、そんな微溫的な事では駄目と考へおる內、終に世界諸國に出稼の同胞と皆樣と密接に結び付けて從來外人に儲けられた利潤を、皆樣と在外の社友の手に收めて貰ひたい事に心付いたのです。

話は替つて賤業婦が遠く母國をはなれて己が血や肉を賣つて稼いた金を、故郷の親や身內へ送るには外國銀行を通さればならぬ、故郷の親しい者は行方が不明で其金が渡らぬ、本人も又土地を替へて奥へ這入る、斯くて其金は外國銀行の懷に殘る、昔から昭和の今日迄其金と利とを合せて計算したら、幾億萬圓になつたらうか、偏鄙な町には日本の銀行がないのも一つの原因ではある。

こんな事を思へば皆樣も出稼人の不便不利を聯想なされるでせう、海の外の事も不明なら海の外から見て內の事も不明です、夫れを照らす爲に太棹社は損得の事に超越して、唯單に社友の爲の勤めと云ふ意味に於て、光明を投げ度いと志しました、どんな小さな輸出入でも、取調でも、面倒でも御世話致升。

皆樣の投書や報告を歡迎致します。

局岩藤
中老尾上

加賀見山舊錦繪（七）

作者　容楊黛

第三

口　豊竹淺太夫
野澤藤吉
中　豊竹百合太夫
野澤大八
奥　豊竹伊勢太夫
野澤市次郎

始終の様子最前より。尾上は一間立出て。あたり見廻り紙崎が侍へ立寄り聲を潜め。様子は殘らず承りました忠臣無二のあなた様。御勘氣の此上は。心元なき御家の有様。行末迚もおぼつかなくあんじいやます世の中やと未頼み有詞のはし。ヲヽやさしくも申されたり。元町人の其元なれども今中老と御取立其忠臣の魂見込頼み置たき一大事。伯父大膳を初め方人の仁木將監。花の方御親子を追失はん謀。何卒貴所の忠臣にて二タ方の御身の上。偏に頼存ると。忠義にこつたる武士底頭平身なしにける。折から出る奥使尾上が前に手をつかへ。只今御出なされませとの仰られでございます。ヲヽ岩藤様よりの使とな。イヤ申主膳様。最前おくにてお局の懐中より落し密書拾ひ置しも詮儀の手がゝり。成程〳〵。心よからぬ大膳岩藤。あの兩人が立振舞某に成かはり隨分心付られよと。言はぬ色なる武士の別てこそは出て行く。おくの方より大杉源藏。道芝を小手しばり。抱への帶を猿轡引立出る足音に。縫之介も走り出。ヤア新参の大杉源藏其傾城を何とする。イヤお騒ぎなさるな道芝に縄かけたは私ならぬ君の仰。細川家のお姫様と御婚禮なさるゝならば此傾城は拙者がはからい市中にかくし置き誰憚からぬお妾様。サア御得心か。御承知なくば道芝は今此座にてたつた一打。アヽコレ〳〵めつそうな夫切ッてたまる物か。スリヤ御祝言遊ばすか。サア夫は。御承知なければ暇乞。サア〳〵〳〵に口どもり應共厭共言はれぬ

手詰。道芝は恨めしげに見上る目には腹立涙只伏しづむ。斗なり。大杉刀拔放し。今が最後と振上る刀の下に縫之介。マア〳〵待て〳〵。待てならば速に御受の返答承らん。いかに〳〵と手詰の折から。當番の侍あはたゞしく。今日書の見廻りに何者共相知れず寶藏を切破り。繼目の御倫旨失せ候。早速注進仕るといきを切て言上す。ハツト驚く縫之介。我預りの御倫旨は何者が奪取しぞ。時も時折も折かゝる悪事も重る物か。こは何とせん口惜やと無念の涙はら〳〵ときこつを。しぼる斗なり。大杉は聲高く。ヤア犬淵早來れ。其方は御舍を御供申君の御前へ來るべしと言付やれば犬淵は縫之介を伴ふておくの間へこそ入にけり。何思けん源藏は。道芝が縄ときほどき椽より下へつき落し。心有て赦し遣す。ソレ勝手次第に屋敷を立退け早とく〳〵と詞の下。嬉しさこはさ一さんに表をさしてはしり行。一間を出る仁木將監大杉がそばへより。初めより一物ある御邊とにらんだ眼違はず。本心聞て滿足致した。然ば事を急になすべし。其手段迚外にもなし。濃茶を君にけんずる時。毒藥を入れ人知れず打取らん我計略。悦ばれよ大杉と。はやり切ッたる詞を打消。サレバ其毒藥粗略の儀は有まじけれど。互の大望分けめの大事。仕そんじては事の破れと念を押されてナニサ〳〵家につたへし秘方の毒藥。其うたがいは無用〳〵。萬事はナかふ〳〵と耳に口しめし合せて居る處へ。早御歸館と呼る聲。何心なく持氏郷。立出玉へば仁木將監むねにたゞへし悪事の鴆毒さもうや〳〵しく濃茶の手前。謹て奉れば。持氏御手にふれ玉へ。ヲヽしほらしや汝が手前と。すでに呑んと仕玉ふ折しも。次の間より聲高く。ヤア〳〵我君其御茶暫く御控へあれと。呼はる聲に仁木は悔り。コレサ〳〵大杉何故御茶を留め召さる。サレバサあの御茶は毒でござる。エヽコレ大杉ソリヤ何を言めす。たつた今此將監がナコレサ差上た茶毒が有てたまる物か。テモ毒にきまつて有るたゞし又毒でなくば先其元毒味なされ。イヤ其儀は。ホヽウ呑れまい〳〵。毒のしるしいで見せんと。茶碗追つ取り庭前の松のしげみに打かくれば。あまたの小鳥一時に落てはかなく成にけり。御覽なされしか持氏公。此毒藥は南ばんより傳はる秘方。かねて認め置きめさるゝ仁木將監。君をしいする謀反の次第。眞直に白狀と。きめ付られて將監が。算用ぐわらりと。イヤコレ大杉毒の事は貴殿にも。ヲヽ一味と見せたは詮儀の種。ふか〳〵と大事を明す大たはけ。主君の御罰こたへたかと。きめ付られて將監はもうこれ迄と打てかゝる。得たりと源藏ゝゝ立ば。ソレ逃すなと將監が下知にむらがる雜人ばら。右往左往になき立つれば立足もなくむら〳〵と逃るをやらじと追て行。透を伺ひ曲者が縫之介と姫君を。小脇にかへ込駈行んとする後より。したへ來りし道芝がコレ縫様と駈寄るを。踏倒し一さんに表をさしてかけり行く。むらがる中を切拔てかけ來る僕の雪平。後に續て藤内が大勢

引具し追取卷。ヤア主なしの紙崎が二合半の浪人僕。腕を廻せとひしめいたり。ヲ、よい處へ犬淵藤内しかりてなしの氣まゝの仕手イザこいやつと仁王立。ヤアくわんたいなる毛奴め物ないはせそ打取れと。藤内が下知につれ打てかゝる雜兵共。シャこしやくなと拔かざし。多勢をくつせぬ手れんの働目ざましかりける次第なり。一間の内より持氏郷和田左衞門御供にて立出玉ふ折からに。取てかへす大杉源藏御前に向ひ手をつかへ。本海道は將監が伏勢有べし。相模川より近道を上屋敷へ御歸館有れ。後は某斗らはん左衞門殿御供と。呼はる聲と諸共に。燈立たる數の松明。手繩かいくり召の駒。和田左衞門が引ッそふて相模川へと急ぎ行。折もこそあり一さんにかけ來る畑介がそれと見るより拔刀切込む切先しつかと留。ヤア心へぬ此ふるまい樣子かたれと氣をいらてば。ヤア成上りのあんかふ侍。うぬが舌より兄主膳家はもつしゆ君には勘當汝が首を手土產に兄への功の時到來。觀念せよと又切込。とびしさつて。早まるな粗忽すな。汝が兄主膳殿を追失いまだ其上に持氏公を毒がいなさんとせしは仁木將盤なるぞ。謀計現はれたつた今相模川へ落行しぞ。早くぼつかけ打取つて兄への功を立られよ。と聞より畑介立上り。スリヤ兄を失ひ其上に家國を押領せんと巧しは仁木將監とや。合点じやまかせと畑介は川原を。さして急ぎ行く。降しきる夜半の嵐に水音も物すさましき相模川。ハイ／／／／と先を拂らはせ。燈つれたる松火に前後を守護し押來るは。足利持氏郷川端近くつき給ひば。後に引添ふ和田左衞門御馬前に謹んで。水は高く見へ候。上の二た瀨は水勢薄く此瀨より御渡りと。申上ぐれば持氏郷川原を差して打ち給へば。俄かにけしとむ駒の足鐙一とあて當させ給へど。後へ後へとたじ／／／。御落馬あやうく見へければ。左衞門は駈寄つて四方をキッとあら不思議や。水火の中も事ともせざりし御召の名馬。恐るゝもの目にかゝらず。何を指してけし飛ぶやらん。夫れ馬は乘る人の變を知らす其妙獸察する所此邊に。君に敵對ふ其伏勢隱れあるに究つたり。立別れて草叢を詮儀せよと下知する折から。百騎ばかりの隱し勢時をとつとそへにけり。スハ一大事と左衞門が眞先に進み出で。何者なれば路次の狼藉。名乘れ／／と聲掛くれば。一揆の中に其有樣大將分と見へたる一人眞先に大音上。御大名の御歸りと存したる此我々。命惜しくは大將の首を渡せ。と呼ばわつたり。左衞門はあざ笑ひ、イデもの見せんと大刀拔きかざし。爰は我等に御任かせ。我が君には此河を打越給ひ。御跡を取切つて敵の大勢一人も此河は越せじ。とむらがる中へかけ入て。上段下段虛々實々入り亂れてぞたゝかいける。君も御馬を早やめ玉へば御供の同勢ゑい／／聲。半ば渡ると見へけるが。樣子見すまし以前の曲者水そこをくゞり行き持氏卿の御馬の足。すばと切ッたる覺のわざ物。アレ助けまゐらせよとあせる斗にしの男。そこ白

浪と流行く。てんでに松明照し合。川下より御死がいをかき抱き見奉ればコハいかに。御首はうたれたり。ハット驚く其處へ。息を切てかけ來る左衞門。呆れはてたる斗なり。思案を極め聲をひそめ。御首打て立退しは一撥のわざに相違なけれど横死とあれば御家滅亡。只何事も隱密／／御病氣なりと世に披露し。家中の内も外樣へは此大變を深くかくし。御後目相續迄事おんびんに計るべし。ソレ御乘物イザ早ふ。とさしづに泣く／／御しがいを皆々よつてかき乘すれば。左衞門も後に立行列迚もそこ／／に。思ひもたどる玉ほこの。館をさして急ぎ行く。こなたの岸へ曲者が。ぬつと出でたる其有樣。御首を口にくはいうそ／／邊見廻し／／。しづ／／として落行樣不敵なりける。三重

◆追悼號發行に就て

小誌「太棹」を產みましたのは私でございますが、產みの母はどうも甘やかしがちで、充分の發育も出來ずにゐました處へ、斯界の權威者小川虛舟氏が父となつて嚴格な教訓を授けらるゝ事となり、どうやら這ひ出してゐた太棹は、此の父に手を引かれてやつと立ちあがつたのでありました、然るに何といふ不幸か、まだ歩みも出來ぬうちにその父に別れてしまうとは——私共は全く前途暗憺、感慨無量でございます。

早速追悼號をと思ひましたが、亡き「父」は九月より十一月まで「發展號」として出さうといふ非常な意氣込みであつたので、茲にその意志を繼ぎ、本號並に十一月は發展號とし、續いて直ちに追悼號を發行する事に致しました。

それにしても、父を失ひました「太棹」今後の發育は、たゞ大方諸彥の御同情と御援助を俟つ外なく、茲に追悼號發行の豫告かたゞ／／只管御願ひ申し上げる次第であります。

主幹　富取壽鹿

本社主催

淨曲大會（第二回）

小島三喜子

本月四日當市上野の松坂屋ホールで催された、開場十二時とあるので已に其時分から聽衆五百を算した、十五分を過ぐる頃ベルの音けたゝましく鳴響く、緞帳は引上げられる、間もなく主催者富取社長が慇懃の態で現はれて一場の挨拶をする、帳は降りる、程なく引上げられた時は島田天賞さんが豊澤猿五郎丈の絃で三十三間堂棟木の由來を語られるのである、太夫も三味も共に若い美男で、高座の奇麗なはデパートのホールにふさわしい、聽衆中にはマネキン、ボーイだと囁くもあり、而して御兩人仲の良い事亦格別、糸と語りと離れぬ所は感服の外はない、ヒーケーバアー（チン、チン、チン）ヒー、カアー、ルウール、杯とお手つないで歩の態はあどけなく、拍手の裡に帳は降つた。

お次が義士銘々傳で野澤道之助丈の絃で平井榮さんの語り、講談聞いても浪花節聽いても、之れ程言葉のメリハリの巧なは鳥渡あるまい、地合は外すまじと多少の遠慮があるだけメリ込んだれど、滿場は唯譯もなく引付られた其又お次が鈴鹿合戰平治住家の段で鶴澤重太郎師の絃で寺岡三幸さんの語り眼鏡をかけて字祿一字も遁すまじとする其熱心さ、敬服の外なく、之れ玄人の眞似の出來ぬ所、而して氣込の鋭き言葉の取遣、難物中の難であるに拘らず、少しもマクれず、些のよどみもなく、聽衆をしてハラ〳〵せしめざる點は、高座の數を經た賜と申すべく、口さばきは當代稀に見る巧者と見へたり段切も澁く、極く古風に語られたは多とすべし、と申すは「音に讀む字を訓によみ、冥途、急ぐ一文字」と字祿にあつたを、淺い寺小屋學問をした藝人共は心なしに「メイド」と讀んで了つた、年數を經て學者が其誤謬を見付出し、作者はそんな無鐵砲な意を用ゐない文章を作るものでない、「訓に讀み」と云ふから引掛けて、「よみぢ」へ急ぐとしたのだと言出してから訂正された、それは後の事である、古い所では三幸さんの流義であつた。

其お次が菅原傳授手習鑑佐太村の段道之助丈の糸で松島松樂さんの語り聲は良し、態度は良し、其上絃とは長い夫婦と見へて息はシックリ合ふ、鬼に金棒、矢でも鐵砲でも持つて來いである、用心深か過ぎる質をモット投出したなら、天下敵なしでもあらう乎、幕になる。

此頃聽衆已に千餘と註せられ、出入の人込の内に長岡將軍が小川先生を尋ねて入口間近に主幹と對話、其附近に土佐太夫の秘藏弟子伊達子孃と猿藏丈と相弟子の猿司孃が陣取つて居る、安藤令夫人が可愛いお子さん連れて特別席に來る、富取北堂がお連れと食堂から出て來る、脊の高い某勅任技師殿が脊の低い虚舟居士と並んで陳列場から歸つて來る、往うさ、きるさもいと繁げく、其裡に幕が明く、お待兼の太功記十段目がやまと新聞人氣投票當選筆頭の安藤どくろさんに依て語られる、絃は鶴澤司好師である、「殘る雷の花一つ」から段切まで丸一段、一字一句も秡かないで尻バネして語り了らせた、而かも此日どくろさんは右の耳を痛め夫が爲め聲の調子付かず、宛然兩手縛られ乍ら奮闘したような有樣で、それ

十一月の運勢

納音生

本年22 31 40 49 58歳の人

是程目出度い月はない、金錢の都合は良くなる、目上の引立はある、而して仕事はトン〳〵拍子に進み、緣談は決まる、佳報とは此事か。

方位　西南と東北が凶

本年23 32 41 50 59歳の人

公事口論や相場などは扣目にするが良けれど、旅行、轉居、開業、金談、等は押して進むに利あり、其他着實な事業や從來よりの事は凡へて障なしと知るべし。

方位　西南と東北及西が凶

本年24 33 42 51 60歳の人

西北の方位から思はぬ助が來ることあり思案におへぬ時は西北から東南に掛けて其方角の知人をあさり、其助勢にすがるが可い、爭ひ事起るか、病人出來るか、離緣問題が湧く恐あり、心すべし。

方位　西南と東北

本年25 34 43 52 61歳の人

別段佳き事もなけれ共、又凶事もなし、唯病人あるか、盗難に罹るか杯の憂はあれど、心に掛ける程のものはなし、氣負せずと何事も勇氣を出して進むに利あり、西北に力となる人あり。

方位　北と南が凶

本年17 26 35 44 53 62歳の人

上運の月でないから些少の難危に逢ふ事なきにしもあられど、己が氣力强ければ其憂なし、唯新規の事は見合はし、在來の事だけして保守を專一とすべし、されど不意に地所や山林等で利する事あり。

方位　西と東が凶

本年18 27 36 45 54 63歳の人

恁んな嬉しい月はない、盆と正月が一所に來たように、不時の喜び事あるか、金儲をするか、出世するか、思ふ人と緣組の話纏るか、何れにしても腹の立たぬ佳報が來る。

方位　東と西と東北が凶

を何んとか、かんとかして大きく立派に語つて千餘の聽衆を滿足させたは豪氣なものである。

幕になると過半の坐席は空になつた切が千兩幟稻川内の段で、糸は道八師の門下道之助丈で、鐵ヶ嶽を榮さん、稻川を松樂さん、おとわを和田春和さんで語つた、掛合は東都各所で演ぜられたれど、之れ程鍛練されたものは稀で、聽衆は皆隨喜の涙を流さん許の有樣で、箱屋の千島の大坂屋は輕妙、目出度打出したは四時を過ぐる廿五分であつた。

破天荒の考案　自分の義太夫を自分で聞け

映畫俳優が非常に早く上達するは何が爲か、自分の藝を自分で見て研究するからである、冷靜な頭で自分の義太夫を他人のを聞くと同樣に耳に入れることが出來るなら、自分の柄に合つた良いものを產み出す道が開けるものである、自分が語り乍らでは良い裁(さばき)は付けられぬ。此意味に於て自分のを蓄音板に取りたいと望む方あらば實費で差上ます。

老後の思ひ出に殘し度いとか、後世に範を垂れたいとか、遠い所の身内や友人に聞かせたいとか、已が藝を他人に坐ながら聞かせるは何よりの贈物だとか、突拍子もない考を懷く方でも、社友であればホンの一ト晩か二タ晩實演なさる費用で、レコードを作つて差上ます、併し社友以外の方は社友の紹介があつても御斷を致します。

本年19 28 37 46 55 64歳の人

臺天の如うな氣持のする月で、何事も思ふに任せず、又自身も心惑ふことありて百事決せず、氣の乘らぬこと夥し、夫故媒介や周旋は避けてせぬが可い、唯當面の事丈勵むべし、幸運自から來らん。

方位　西と西北と東南が凶

本年20 29 38 47 56 65歳の人

八方塞がりて仕方がない、波のまにまに浮きつ沈みつして、無暗に足掻かぬが良い、斯くて後一ト月我慢すれば年と共に一陽來復して、幸運の港に達すべし、ゆめ力落すことなかれ。

方位　西南と東北が凶

本年21 30 39 48 57 66歳の人

錦衣を着て寶を得るの象と云ふ此上もない月で、目上の引立を受けて意外の利潤を得ることがある、新規に始むる事或は舊事凡てよし、たゞ色情に付て注意。

方位　東と西が凶

× × ×

第七回 東都聲義會大會成績

審査　豐竹湊太夫

玉三	一六六	三芳	菅四
油屋	一五九	叶路	紙治
寺子屋	一三五	關樂	本下
毛谷村	一三〇	松樂	合邦
紙治	一二八	貴酬	中將姫
長局	一二三	壽瓢	山名屋
安達	一二一	龜鶴	辨上
鮨屋	一六四	あづま	先代
城木屋	一五七	語樂	毛谷村
御殿	一三一	雲雀	柳
酒屋	一二九	むつみ	沓掛
野崎	一二四	悅子	堀川
御殿	一二二	五聲	油屋
玉三	一一九	團昇	鈴ヶ森

一一八	春帆	本下	忠合
一一三	立昇	忠三	鮨屋
一〇三	吾樂	鳴戸	柳
一〇〇	一重	酒屋	寺子屋
九九	公柳	佐太村	忠六
九三	さ璋	合邦	本下
九〇	辰壽	湊町	質店
八八	□○	査	伊達平
一一七	冠之	無	無
一〇八	里芳	とを	審
一〇一	花王	ときわ	審
九九	林昇	和風	松玉
九八	武藏	可京	喜久子
九二	錦勢	たもつ	清司
八九	涙川	査	清福
八五	洗玉	伊達平	春帆

イロハ順

イロハ順

入賞者

□龜鶴○

第七回 東都聲義會

時柄節理事中より二三の不出演者を出だしたるにも不拘、秋本雲雀氏外幹部諸氏の努力空しからず、殊に湯原清司氏の奮起は遂に竹内たもつ氏の出演を見るに至り、其の活躍實に目ざましく、旬日を出でずして、迅雷突風的に大多數の出演者を以て、同會創立以來の大會とも謂ふべく、九、十の兩日淺草並木倶樂部に於て開催され、定刻前より既に立錐の餘地もなき盛況を極めた。

——芳河士——

（初日）評 井上驢胖

新口（清鳳 絃平）太十（三玉、豊光）先代（松華、善兵衛）遲れてむつみ氏より聽く。

■酒屋（むつみ、新次郎）「あとには」からサワリ書置を拔いて段切まで、節を專らとする女の持前で瑾のない出來であつた。

■中將姫（公柳、鶴助）廣嗣の詞も浮てゐる、聲が肚から出てゐぬので騷がしい、絃の鶴助は悠々と構へ本格に彈ても語り人が若いので機轉がない。

■合邦（可京、仙十郎）聲もあり叮嚀に覺へてはゐるが、開口が惡いので明瞭を缺く。

■忠六（乃菊、柳司）稽古は積んだ人と見へ、聲も體度も整つてゐる、「金子ナ持つて」ヲはノと語るべし、詞は味い。

■本下（泉、團市）女としては伴左衛門なども男も及ばぬ味を語つた、美聲ではないがサワリ等立派なものである

■菅四（涙川、和孝）「五色の息」は口より急いで吐出す樣に聞へた、「小太郎が母」假名で延びた、「御臺若君」の出を絃に二度催足されるは不覺。

■質店（伊達平、猿昇）久作の出から詞も注意は認めるが「旦那へ禮は付たりじや」は足らぬ、「曲まぬが未だ不思議」は不味い。

■一の谷（武藏、團市）「相模は」から「座に直れば」まで、聲も傷んでゐる樣であるが冴へぬ、物語は全力を集注したと見へ聞直した。

■鮨屋（松玉、新次郎）「神ならぬ」から「知らぬ」間を踏む聲が奇麗なので內侍の口說大受け「たへ入り玉ふ」は締らぬ、サワリは良し。

■柳（喜久子、清一）枕から拔き〳〵段切まで、節は絃が彈けるので危つけがない、詞も注意充分。

■酒屋（和風、壽鳳）「半兵衛涕の顏を上げ」は宗岸の誤り、サワリは美聲で極り處は受けてゐた。

■寺小屋（春帆、巴麿太夫）「一字千金は人形座の外珍らしいが、直ぐ「夫婦は門の戶」へは燕の列車より早い、まだ年も若いが肚もあり、稽古が肝腎、「最一度見たさに未練と笑ふて」と一息は未だ息が出來ぬうちは語らぬ方がよい、いろは送りは無難。

■港町（たもつ、燕作）世話物專門と自他共に認める人、清十郎は勿論、お梅、お夏も地にある聲柄、殊に太左衛門が語れるは床數の賜である。

■長局（壽瓢、吉松郎）「神ならぬ身の夫れそとも」の件りは絃が廻らぬ、巧者な御醫者申されましが」此のがは離さず語るべし、詞は語れた。

■紙治（貴酬、知孝）程の好い聲でサワリも受けた、詞の末の一字が皆地合に掛るは注意、五左衛門は硬くなり過ぎて歌舞伎染みる。

■忠六（湯原清司、巴麿太夫）聲柄に欽つた語り物、二人士の出も良し、「兎しナ」「金子ナは」ヲである故、ノと語るべし。「ウッ、ケ」は「ウッケ」である、腹切も良し、併し「たまり兼て」より「一通り聞てたべ」まで息を休めてはダレる。

■先代（雲雀、絃平）調子が變らぬ聲故、人形の少ないものを出したは悧巧である、米洗も能く叮嚀に出來た。

■油屋（叶、新次郎）貢の出から喜助との取り遣りよし、萬野の憎味も貢の息込俱に良し、お鹿は大受け、聲柄で語り物を選定するは力だけ味い。

■鮨屋（あづま、絃平）冒頭から「落つる涕ぞ」まで、「並べてゐる處へ」三味の濟まぬうちに語り出すは不覺、衒りはよく語つて母親との「親子して金を漬けたる」の息面白し、彌左衛門は樂なもの、維盛の詞も品位あつてよし。

■太十（掛合）壽瓢、清司、和風、たもつ、雲雀、團昇（絃新次郎）

（二日目）

御殿（洗玉、呂福）梅由（聲司、絃平）油屋（錦勢、團八）が終つた處へ行つた。

■柳（里芳、勝助）東北訛りは取れたが、未だチョイ〳〵殘る、「今自らが言殘す」調子が危かしい、節詞共大分良くなつた。

■先代萩（□○、絃平）前回より進步した、地方訛りが耳に立つ、八汐の笑ひは嬉しかつた「とは云ふものゝ」調子危かしい。

■辨上（辰壽、芳太郎）送りは稚々しかつた、三忘は熱があつた「暫く心奧の間」の字割が未だ、「コレハ〳〵御二方樣」は口先である。

■本下（清福、巴麿太夫）「芭蕉葉の廣きも今は恨しく」疎雜、「金銀ナ」はノである「恐れ入たる御仰」躓く、詞は古い人と見へ相當の思案も語れるが、節が出來てゐぬ。

■呑掛（花王、六太郎）八藏の出を彈たに悠くりして追敷で出直し、慶政の詞は小さく聞き取れぬ「とつ置いつ」は「トッ、」でなくてはならぬ「かくる刀はシッシッとして」は「せつせつ」

である「苦しむ母の背を撫でさすり」曖昧、母の詞は寫實的か聞へぬ、肝腎の段切で二度目の絶句は不覺。

■毛谷村（松樂、清一）「深き惠みもありぬべし」假名割が悪い「無理に上座で切つた。

■合邦（一重、芳太郎）床度胸が無いのか硬くなり過ぎて持前の聲が出てゐぬ、節詞とも叮嚀であつた。

■堀川（林昇、若好）冒頭から與次郎の出に飛んだ、「憐にもまた」から「頃しも」程の能い聲柄で節詞も叮嚀に覺へてゐる「そりや聞へませぬマ」は少し嫌味だがよく語つてゐた。

■鮨屋（吾樂、越喜太夫）「神ならぬ」からサワリまで、節詞も叮嚀に語つてゐるが、兩人とも活氣がないので聞く人もモジ〳〵した。

■山名屋（さ璋、勝助）八九才の娘で口も廻り節も能く覺へて、男の大人も顏色のない人もある。

■寺小屋（湯原清司、雛助）源藏戻り「跡見廻し」は節の數が足らなかつた「叱り付れば松王丸」は緩くり過ぎる「胸轟かす斗也」と「甘へる顏は馬顏」は三味と息が合はなかつた。

■合邦（乃菊、柳司）「影さへ」から大落しまで、チョイ〳〵間を踏む處もあるが、確かな人だけに目立つ。

■忠三（とをる、紋左衛門）古い人故聲が肚から出てゐるので、滿場耳を傾ける「今更——抜くに——」は絃に隨く、帥直は「鮒だ〳〵鮒侍だ」も大舞臺「本性よな」を言はず「本性ならば」絶句の形。

■紙治（立昇、彌玉）小ヲクリを三上で彈ひたは珍らしい「其樣な」節が足らぬ詞がウカ〳〵した、治兵衛と見へぬ。

■毛谷村（冠之、播代）地は得意でないと見えて、詞と正反對であつた。

■安達（龜鶴、絃平）性來能い聲を持つた人、冒頭に外れそうな聲を遺すは罪だ、詞は活動して居る、イとエが混線するに注意、「二世の夫にも引別れ」は不味い。

■玉三（團昇、猿藏）近來メキ〳〵上げた、金藤治の笑ひなど味く扱した。

■御殿（五聲、絃平）榮御前の出から、語り物が欲らぬ、八汐は好人物であつた、榮御前は餘り變らぬ、政岡の口說は出來た。

■野崎村（悅子、彌玉）今花形の語り人、美人だけに受ける、久作は無理でも、あとの三人は骨が折れぬもの、サワリで切つた。

■佐太村（可京、仙十郎）相變らず口開が悪く、白太夫が強く永い「あつたら若者殺せ——」口の中でハッキリせぬ「南無阿陀佛」も曖昧。

■鳴戸（ときわ、清一）「氣付も水もモウ通らぬ」で長絶句は不覺、お弓の口說は絃と息も合つて良し。

■寺子屋（關路、雷糸）「スワ身の上」首實檢の間、松王と源藏の息良し「コリヤ最前言たはこゝの事」は餘り輕い

千代の口說は大受け。

■城木屋（語樂、團市）低くい調子で世話物を語るは年劫が無くては場が持てぬ、丈八の滑稽も態とならず、お駒のサワリまで受けた。

■玉三（三芳、猿三郎）聲柄がシックリとはまり、金藤治が手を負つてから一層立派な出來であつた。

■戻り橋（掛合）綱（叶、猿藏）鬼女（ひばり、絃平）

祝發展

嵐司光

■質問欄

（答）響阿彌

■問＝太功記十段目尼ヶ崎の段文中、小田の蛙の鳴く音をばの下「とゞめて」と「とゞめで」と何れが正當なるや。（秋田初心生）

□答＝とゞめてはならぬといふ意味でありますから「とゞめて」とならなくてはなりませぬ、とゞめで敵にさとられぬやうと言つては意味をなさぬ、此時代の文癖です、逆にお考い下さい。

■問＝玉藻前三段目道春館の段文中「今から誰れとついまつや」とある「ついまつ」とは如何なる儀なるや。（秋田初心生）

□答＝人を待つではなく歌心で、誰を便つて話をしやうかといふ意味のかけ言葉であります。

◆豫告

義太夫古蹟巡り

豐澤芳太郎
豐澤猿喜知
豐澤團四郎

前記豐澤芳太郎外二氏は、毎月稽古の休日を利用して義太夫に緣古ある東京近傍の古蹟を探究してゐられました處、今度本誌の爲め「義太夫古蹟巡り」と題して、次號から寄稿される事になりました。

先づ兩國回向院から始まりますが、矢口の渡し、目黑方面の事蹟等、々、附近の風景とその趣味は、號を追ふて愛讀者諸君の前に展開されます。

太棹俳壇

芳河士選

秋雜

新涼や葡萄盛り來る椽傳へ　胡天關
新涼や賣り來る露の花小草　同
秋涼し魚下げ來る河原道　同
稻妻や淡路へ通ふ飛脚船　義狂
鎌を磨ぐ鼻先ぬけしとんぼかな　同
萩咲くや檜笠干す尼の寺　同
山僧の水汲む方や天の川　水村
百舌鳥なくや早や二の峯は暮てあり　同
茸狩の友誘ひけり宵の雨　山田生
後先に小村をはさむ花野かな　同
川船の茶殼投げたる月夜かな　月城
雨あがり秣の中に虫のなく　紅葉
初秋や明るくなりし仁王門　一流
秋風やさはれば落る草の種　うしほ
露白し夜店の跡の捨て莚　桂軒
月吹いて出船に遠き嵐かな　花溪
古池に影新らしき尾花かな　夢之助
積藁の匂ふ夕日やとぶ蜻蛉　鏡月
百萬の人氣動かす花火かな　冬山
ひた〳〵に何の刈株落し水　たい子
新梨の齒ざはりよき夜稻妻す　嵐舟
穗芒の戰げば月の動きけり　ふみ子
舟に居て兩岸の虫を聞く夜かな　弓男
壁塗れば土の香高し秋の風　かつら
椋鳥の空に一群秋高し　冬月
瀧よりも上に寺あり夕紅葉　勝子

人

綿を取る顏のほてりや飛ぶ蜻蛉　文彌

地

砧打つ家相似たり薄月夜　房雄

天

野に猛き焚火の數や秋晴るゝ　竹外

□舊作　芳河士

燒跡の草伸びしまゝのとんぼ
山に日が落ちても明るい野の蜻蛉

■次號（冬雜吟）十句以下　—〆切十月三十日—

大會と小會

井上驢胖

◈葵祝賀會

（九月廿四日）

やまと新聞主催素義十傑投票入選祝賀會を新宿倶樂部に於て開會、圓滿な交際家だけに奇麗な顏も見へて簾内より滿員の盛況であつた。

▼草履打（宜子）キビ〳〵した語り口能くなる。

▼酒屋（都、宜子）詞は語れたが三上の聲が支へる、調子も危つかしい處があつた。

▼野崎村（掛合）久作、下女（たもつ）お光（喜久子）お染（葵）久松、母（都）絃（燕作、ツレ猿若）久松の「曇り勝なる」で脫線の外は能く調和した。

▼安達三（葵、燕作）まだ出來て間が無いと見へ精錬したものではなけれど、荒削りとしては立派な語り物であつた。

▼先代（樹昇、龍太郎）聲も良く癖のない有望な語り口であつた、然しチクリから出を催促されるは不覺である。

▼又助（東司、重之助）大連故「聞く又助」から大落まで立派な聲で、詞も動くが節廻しが如何にも不自由であつた。

▼寺子屋（掛合）源藏（二三樂）戸浪、百姓、小供（富士）松王（紅葉）玄蕃（東司）千代、御臺、若君（一幸）絃（和孝、重之助）源藏は餘り緊張ー過ぎて始めより怒つてゐた、戸浪、百姓、子供などは光つてゐた、玄蕃は欲つてはゐたが「檢使は四方八方へ」トチリ「玄蕃は始終眼を配り」も緩くり過ぎた、松王は詞聲柄よし「ためつすがめつ」が届かぬ、三度目の詞は餘りネバつく「世上の口に」かゝり脫線、千代は「未練ゝ笑ふて」「歎きも洩れて」「夫婦が上着を取れば」「賴みし賴まるゝ」節尻まで全部脫線「京は古鄕へ」の段切だけ立派であつた。

▼藤枝宿（掛合）彌次（宮古）北八（都菊）馬士（富士）甘酒婆（貴洲）絃（和孝）彌次北八の滑稽は腮を解かした、馬士の方言も面白かつた、婆の彌次の棚下ろしは譯もなく受けた。

◈東松會

（九月廿七日）

人氣俳優我當が舊劇の要素なる義太夫習學を志し、其披露かたゞ〳〵松坂屋ホールに鈴木一信、伊志井寬兩君共演義太夫會を開催した、新舊俳優の出演に花柳界の奇麗な處も見へ、早くから滿員の盛況を呈した。

▼解說（三宅孤軒）伊賀越道中双六起源。

▼沼津里（增田小力、素澤力彌）二の開いた聲柄で枕の「東路や」も出來た、平作と重兵衛の取り遣りも無難「平作は千鳥足辛度が利になる蒟蒻の」肝腎な處が練習が足らぬ「毛羽打枯ー松影に俱ひ」の送りが尻がない、絃は素人の藝とは思ひぬ。

▼平作内（伊志井裸寬、燕作、胡弓扇之助）新派役者としては博へも發音も型通りに出來てゐる、平作の詞は搾へ過ぎた、サワリもよし、重兵衛の「コレ姉御爰へごんせ」繰々しく歌舞伎に成る、千本松は泌みりと聞かせ大出來であつた。

▼ひらがな盛衰記解說（坂本猿冠者）

▼逆櫓（鈴木一信、司好）癖のない達者な

語り口、權四郎の笑ひは輕妙である、お由の口説も無難「權四郎頭が高い」「定めて音にも聞きつらん」は今一息と思つた、逆櫓も達者、修羅場も文章明瞭、當日の聞きものであつた。

▼近頃河原達引解説（田村西男）

▼堀川（片岡東松軒、吉作、ツレ仙十郎）

義太夫便利部

日本橋區龜島町二ノ廿八

秋孝堂印刷所

印刷物は迅速、叮嚀、廉價に調製致します。

枕能く語り、鳥邊山の歌も母とおつるの區別など手に入つたもの、與次郎と母の取り遣りも態度でヨリ以上の情緒を聽かせた、「母が喘ればこそ」で一寸躓いたが穴を明けぬは偉い、サワリの「振り捨て女の道が立つものか」大受け、遠廻しは絃二人の息が合つてゐるので語る人も樂であつた、然し扇遣ひが多いやうだが今時は流行らぬ、其上段切で兩手を捧げる歌舞伎の口上披露の型は權式を缺くやうに思ふ。唯通人揃ひ故廻り舞臺を用ゐしと、大阪の太夫を出し「是までは うそ〳〵」の洒落は面白い、併し二番は利かぬ。

◈合同會

（十月四日）

久し振りに松月で鶴玉、播菊合同を聞いた、席は能いが如何したものか客が薄い、商工業の多い故でも有らうが惜しいものである。

▼宿屋（松樂、鶴玉）達者には語つてゐるが、稽古が粗雜なのと、扇遣ひが目立つ、段切の「山田の惠み彌增さる」も口の内でムニヤ〳〵。

▼寺小屋（鳳翔、播菊）「夫婦は門の戸」から叮嚀に覺えてゐるが、總體に抑揚に乏しい、詞は今一息突込で節よりも一段と高く語る習慣が必要である。

▼酒屋（福光、播菊）送り返しを彈かずトン〳〵〳〵シャンと張節を彈くは大會の時間制度ならば格別、普通の會であり其上語り物が淋しい情景を現はすもの故、今後は絶體慎しむべし、宗岸と半兵衛の取り遣りも能く語つた「縛られて戻らしやつた」「暫く爰に」が地合に成る「樋の口開けし如く也」の節の中で湯を呑むは不可「あとには」ハル節と大廻しの合の子である、聲もよし肚も强い上活氣もあり、勉强あれ。

▼蝶花形（百塚、播菊）「耳にも懸けず音近」から東北の訛りが鼻にかゝるが、聲は珍らしい奇麗な立聲故自然詞も抑揚が無く節も諷ふ傾がある「血汐染なす」がムニヤ〳〵となり「父と父とは千萬無量」二度出た、聞く客は大受けであつた。

▼太十（柳蝶、鶴玉）十次郎と初菊の「二世も三世も」の取り遣りも泌みりと語り「こんな殿御を持ながら」も良し「前後不覺に泣居たる」節尻の濟まぬに湯を呑むは注意「窺ひ寄り」張りが足らぬ、皐月の詞に太夫を助ける積りか詞と詞の接續にウレイの絃を彈くは歌舞伎式である、詞では泣入の外は入らぬもの、サワリは大受け。

讀者の聲

■投書歡迎

一單に義太夫のみでなく何でも結構です、但し人身攻撃は沒書

一用紙隨意、締切毎月十五日

▼九月發展號の八頁末節にあつた津太夫が文太夫時代の逸話をモット詳しく知り度いものです（小山の八卷生）

▽答＝小川先生に御尋しましたら、逸話集の種に話そうと思ふて居たのだが、概略は、旭檢番に愛之助と云ふ太棹藝妓があつて、僕が鳥料理の離座敷に居たのを知つて注進に及んだ、『今ネ妾達三人魚ノ棚の近直に呼ばれたのよ、スルト三人の客、揃の浴衣で大阪のポンチ連らしい、その一人が妾の本箱を捻繰廻して勘作を見付けて、夫々語るから彈いて呉れと言出した、其前からチト變だとは思ふたが、他の二妓は氣が付かないでサワリをやりました、妾は要鎭して居ました、それで彈き出すと故意と變な方へ聲を持つて行きますが、本職は爭へませぬ、字祿を繰り〳〵ゴマ章を目枕に一段やりつけましたよ」其話が終る頃には聞き役の僕の口へは、一ト切の肉も這入らないで、折角煮付けた鍋の肉も皿の上のも無になつて居た。

之れ抔は上の部で、男と切れたと泣き乍ら入り込んで來て、惚氣を言ひつゝ三四人前平げて後、ヘイ左樣ならをキメるのが多かつた。

程なく大阪の北　新地で高助（新橋へ來て高之助）に逢つて、その話をすると「アラ驚いた、文太夫サンは勘作は知らはれしませんのに」（記者）

▼麻雀に必要な支那數字を教へて下さい。（大泊、眞田）

▽答＝困りましたネー、義太夫の雜誌にチト不向ですが、發展號の事だから特別に一から十まで。

一（イー）　二（リヤン）　三（サン）　四（ウー）　五（ウー）
六（リユー）　七（チイー）　八（パア）　九（チユー）　十（シイ）

▼自分の義太夫を自分で聞けと云ふ事則ち蓄音板に取る事は時々に自分の進境を追ふて行く事が出來るので全く破天荒の考案で相當に流行する事かと思ふが實費を表示した方が宜いではないでしようか、申込所も同時に掲げて置く方が宜いと思ます。（秋田縣仙北郡林清胤）

▽答＝之が本統の御親切な聲で感謝します、アレハ廣告でないからと云ふ考からお金の事は略しましたが、明記せねばならぬのです、六分間分約廿圓で足りませうが種々の事から多少の增減は有升申込所は太棹社であり升。（記者）

▼久良岐さんの川柳は結構です續々出して下さい。（本郷、十八番地）

▽答＝承知しました、先生に御願して置ませう。（記者）

▼二千圓借入度いですが融通しますか。（本所、馬島）

▽答＝良い質問です、直接金貸に申込なさい。（記者）

▼南米へ行き度い、明細を知らせて下さい。（いノ一番）

▽答＝社へ來て下さい。（記者）

▼貴社の義太夫會には申込規定がありますか、誰でも出演が出來ますか。（天狗生）

▽答＝申込規定などはありません、どなたでも出演が出來ますから御申込下さい、但し自稱天狗で、餘りヒドイのは困ります（係）

會報

大會と小會とに評せしものは省略す

五十義會主催
追善義太夫會

本月五日日本橋倶樂部に於て五十義會の主唱で和十、一俵、士調、迂也、春音、壽鶴、紀昇等七氏の追善の爲め義太夫會を催した、出演諸氏の語物は左の如くである。

高野山（呂光、重太郎）廿四孝（春音、紋左衛門）忠六（市菊、重太郎）寺小屋（語幸、米翁）太十（美登利、吉作）先代（語松、語左衛門）陣屋奥（武藏、團市）寺小屋（金鳳、米太夫）鮓屋（松玉、新次郎）阿漕（三幸、重太郎）柳（里芳、勝助）先代（五聲、紘平）酒屋（松寶、重太郎）沼津（巴仙、米翁）大切野崎掛合ー久作（桔梗）お光（千鶴）お染（梅枝）久松（市菊）後家（三芳）およし（峯水）紘（團左衛門團市）

中にも巴仙君が沼津の段で重兵衛に對する平作の言葉を假りて、物故したる前記七氏の俗名を唱へたは良い思付であつた、切の野崎掛合は斯界の元老や歴々の出演とて、些の缺點もなく、何かの掛合としての摸範を後世に垂れたとでも申すべく、尤も淨曲の掛合としては如何なれど、何んとしても東都義太夫界の名譽とも謂ふべき上乘の出來でありしや否やは不明なれど、故人を想ふ至情の爲めにアンナ掛合となりしは、是非もなき次第にて、情誼に敦い人々ではある。

開會の始め三井會長の挨拶あり、次いで同氏の讀まれたる吊辭は左の如くである。

悼辭

昭和五年十月五日

我が東都五十義會創立當初より或は其發起者となり或は賛成人となり引續き本會の目的に向て勇往邁進し他の毀譽褒貶を省みず途に今日の隆盛を致せし七氏の英靈を祭るに際し謹ゝて故人遺德の一班を頌し會員諸氏と共に涙を新にせんと欲す。

顧れば本會創立の翌年九月關東大震災は東都を擧げて阿鼻叫喚の巷と化し其慘禍古今に絶し死者實に數萬を數ふ。

我飯田迂也君及田中春音君亦不幸其數に入る。

迂也君は天資聰明品性高潔其熱心にして正道を歩む。

藝風は實に當時若手新進中の錚々たり將來に多大の期待を殘し年齢漸く自立を過ぎしのみにて物故せり實に惜しき極みにこそ。

春音君は本會創草當時の審査員にして其藝風亦人物性格と相俟つて常に一派を成し老熟の域に達せり。

就中天王寺村は氏の最も得意の語り物なりき。

中井壽鶴君の易簀に遭ふや人皆人生の果敢なきを痛感せり君は本會の幹事として奮闘せらるゝ事年あり本會の發展に貢献せし事勘からず不幸病患腹臟を浸し再び起つ能はず忽焉として逝く痛恨に耐えざる也君は温厚の紳士にして又理財の才に富み事物に當りて極めて熱心且奮闘家なりき從つて藝風も亦性格と共に堅實にして正道の義太夫家たりしなり殊に菅三の佐太村は君の最も得意の語り物にして他の追從を許さゞるの妙味あり會内に重きとなせる又故なしとせざるなり齡耳順を過ぎしのみにして去惜別の情禁じ能はざる也。

審査員田中士調君は東都に於ける斯界隨一の老錬家として推奬せられたり其枯淡の藝風は聽く者をして魅了ぜずんば止まず就中白木屋の如きは輕妙の至藝也今も尚其語り口を模するものゝあるは豈故なしとせざるなり氏は藝界を引退するや餘生を舊都の僧坊に送り風月を友として古稀の壽に近くして去る終りを完ふせしと言ふべし。

次に審査員豊田和十君及會員坂西紀昇君の死を衷心より哀惜するものなり和十君は極めて波瀾多き生涯を送られたり其義太夫界に貢献せらるゝ功績は實に偉大なるものありき君は後進を誘導の援助に勉めし事極めて多く或時は義太夫名鑑を作り雜誌を刊行して多大の犧牲を拂ひ斯界の向上發達の爲め努力せられたり君は稀に見る難聲の所有者なりしが熱意火の如き研究心と努力とに依つて遂に大成するを得素人義太夫界の名家二代目和十を襲名せる一事を見るも如何に奮闘なりしかを知るべきなり晩年引退後は極めて不運にして終る誰か往時を偲びて一掬の涙なからんや。

最後に細川一俵君の死は哀悼の念に堪えざらしむ君は本會の創草より幹事として宿痾重き身を東奔西走會の發展少壯派の誘掖の爲め自己の地位を顧慮する處なく盡瘁せられたり君は本會の大なる恩人なるのみならず其死は全素義界の爲め大なる損失と言ふも過言に非ざるべし君の藝術は全く熱其のものにして聽者をして絶對感動せしめれば止まぬ底のものなりき從つて自己の語り口に對ー自負する處極めて厚かりしが本會の創立後初會の審査に於て不側三段目に着位し爲に茫然自失の淵に沈淪せしと言ふ當時君に寄する同情や言外なりき然るに君は意志の人勇奮一番地位の挽回を志し其努力其精勵遂に二段目より幕内に入るを得たり此一事を見るも君は全く意志の人にして有數の奮闘家たりし事證するにあまりあり以て後輩の範とすべき人物なりとす前途尚春秋に富む身を以て宿痾重り又再び立つ能はず年齢不惑にして冥府の客となる痛嘆の極みと言ふべし。

過去に於ける東都五十義會は其基礎未だ不安にして種々難關に遭遇せり殊に採點を以て審査し等級を定めるの制度は一般に未だ理解せられず往々權威ある審査員の採點にも屢々物議を釀したり此間にありて諸君は常によく公正の態度を持し居中調停の勞をとり辯護誘導の任に當られたり今や本會は常に君子の交りを以て互に切瑳練磨只管藝道に精進せられ年を追ふて益々盛大と致すは皆諸君の殘されし功績と言ふも敢て過言にあらざるべし。

茲に諸君の冥福を祈り英靈を慰め追悼義太夫會を開催するに當り謹みて蕪詞を陳べ哀悼の意を表す。

在天の靈　夫れ來り饗けよ

東都五十義會々長

號　篁鳳　三井資光

聲友會秋季大會

十月十七日、會場日本橋倶樂部、番組左の如し。

壺坂（順子、紋左衛門）辨慶（きよ子、喜久子）柳（峰子、清一）太十（喜久子、清一）酒屋（都、猿若）鰻谷（たもつ、燕作）寺子屋（武藏、團市）陣屋（語松、米翁）赤垣（とをる、紋左衛門）岸姫（金らん、紋左衛門）忠四（葵、燕作）先代（吳羽、猿三郎）堀川（ときわ、紋左衛門、紋三郎）阿古屋（掛合）阿古屋（たもつ、燕作）重忠（語松、米翁）岩永（とをる、猿三郎）榛澤（金らん、紋左衛門、三曲紋三郎。

東都五十義會

十月廿八、九兩日芝區櫻田本郷町飛行館に

於て開催。

九月（十日以後）

▼かな文字會　新宿倶樂部（十三日）
玉三（みやこ）壺坂（ときわ）長局（たもつ）沼津（とをる）絃（かな文字會）

▼五聲會　帝國ホテル（十八、九日）
忠三（旭）夕顔棚（可笑）京都見物（千里）沼津（松樂）岡崎（東松軒）岸姫（三芳）紙治（聲鳳）絃（五聲會）
妙心寺（可笑）昔噺（千里）太十（旭）玉三（三芳）壺坂（東松軒）鮨屋（松樂）先代（聲鳳）絃（五聲會）

▼語樂會　新宿倶樂部（十九日）
松王（襟四）朝顔（いづみ）先代（よろづ）本下（麟昇）沼津（語幸）野崎（有曲）陣屋（語松）絃（語左衛門）

▼素絃會　新宿倶樂部（廿一日）
壺坂（和紅）帶屋（兜）太十（たもつ）鰻谷（福笑）岸姫（三芳）絃（素絃會）

▼竹韻會　小石川倶樂部（廿三日）
壺坂（長平）帶屋（たもつ）宿屋（ごくろ）

▼團の字會　新宿倶樂部（廿四日より四日間）
妙心寺（可笑、仙十郎）本下（泉、團市）

ハカマの天狗
見臺と肩衣
日本橋區人形町通り
濱口本店（秋華）
電話茅場町二六三五番
振替東京三五三四番
支店　横濱市吉田町一ノ九
工場　日本橋區松島町三四

佐太村（可京、仙十郎）鳴戸（東華、團市）帶屋（阿松、團左衛門）安達（浪補、團市）夕顔棚（可笑、仙十郎）戀十（潮、巴雪）合邦（可京、仙十郎）太十（千鶴、團左衛門）柳（三四、團市）忠三（嘉久子、仙彌）寺小屋（清司、團八）合邦（鬼定、團市）酒屋（東華、猿藏）陣屋（宮古、團市）合邦（兜、良造）沼津（ろ昇、團市）野崎（葵、燕作）油屋（錦勢、團八）先代（たもつ燕作）

▼鶴澤民造追善會　小石川倶樂部（廿六日）
太十（壽孝）日吉（和歌壽）柳（梅昇）太十（東聲）忠三（吉壽）十種香（藤枝）鳴門（壽樂）先代（千鳥）鈴ヶ森（盛壽）寺小屋（壽邦）沼津（山鳥）壺坂（南木）合邦（一三五）二度目（松枝）絃（民壽）

▼めばえ會　福壽倶樂部（廿八日）
沼津（菊江）太十（小芳）本下（清光）酒屋（松吉）紙治（已佐吉）十種香（春吉）

▼入形入團の字會　新宿倶樂部（廿八日より）
新口（山城、團市）酒屋（ろ昇、團市）太十（君子、巴津昇）堀川（貞子、團市、きん子）陣屋（武藏、團市）鳴戸（お弓加光、お鶴龍幸、絃仙彌）沼津（ろ昇、團市）安達（宮古、團市）

鰻谷（昇、團市）太十（猿司、團市）寺小屋（武藏、團市）廿四孝（東華、猿藏、猿三郎）

十月（十五日まで）

▼人形會　新宿倶樂部（一、二日）
安達（千歳）忠六（二三樂）佐太村（蘆江）赤垣（源）絃（良造）
朝顔（一葉）寺小屋（一幸）袖萩（晴海）沼津（京樂）絃（良造）

▼かな文字會　新宿倶樂部（十五日）
玉三（みやこ、喜久子）又助（しげる、とみ子）忠四（とをる、紋左衛門）酒屋（ときわ、紋左衛門）野崎（たもつ、燕作、喜久子）

□地方

▼白柿會　清樂亭（小田原）
九月十三日—紙治（都）太十（桂）鳴戸（薫）御所（要）忠六（柏）
同十四日—布三（都）陣屋（桂）御殿（薫）忠六（要）本下（柏）

▼稻太夫歡迎義太夫會　遊樂座（秋田縣淺舞町）
九月廿八日—鈴ヶ森（五月）山別（れい子）小磯（雪江）太十（壽笑）忠六（巴蝶）揚屋（淺子）松王邸（、樂）柳（千代榮）壺坂（柳糸）阿漕（可豊）朝顔（力彌）鳴戸（美咲太夫）本下（早苗太夫）紙治（稻太夫）

◈消息

——素——

▼鈴木松寶氏—鈴木源助氏（松寶）は先代の名を繼ぎ甚四郎と改名。
▼奥村喜樂氏—五十義會へ入會。
▼角井しげる氏—かな文字會へ入會。
▼平山蘆江氏—都新聞より退社。
▼山脇美佐尾氏追善—秋田縣湯澤町に於て七八兩日開催。
▼追福義太夫會—二十日より三日間秋田增田町にて。

——玄——

▼義太夫人形座—十一月三日淺草並木倶樂部に開催。
▼竹本稻太夫—九月廿八日秋田淺舞町へ。
▼豊竹呂太夫—九月廿六日逝去。
▼竹本朝見太夫—府下品川町北品川宿六一番地へ移轉。
▼三國太夫追善—野澤雁四主催にて九月十九廿日豊橋市河原座にて開催。
▼鶴澤友若—大阪市此花區茶園町八一番地へ移轉。

■寄贈新刊

▼孤軒句集（三宅孤軒著）發賣元—麹町區丸ノ内三菱二十一號館粗山書店
▼大和民徒强健法（山田雲峰著）發行所—麹町區隼町二八强健社

▼浮瑠璃世界　京都　浮瑠璃世界社
▼明るい家　東京　同人社
▼藝　朝鮮　朝鮮文藝社
▼獺祭　東京　獺祭書房
▼土　岐阜　ウヘイ社
▼赤壁　東京　赤壁吟社
▼露　西宮　關西藝術新聞社
▼浮瑠璃時報　東京　浮瑠璃時報社
▼寒菊　大阪　寒菊社
▼藝界新聞　東京　藝界新聞社
▼浮瑠璃月報　久留米　浮瑠璃月報社
▼大日本浮瑠璃界　福岡　大日本浮瑠璃社
▼浮瑠璃雜誌　大阪　浮瑠璃雜誌社
▼醫文學　東京　醫文學社

本倶樂部の誇は

▼室内の奇麗なること。
▼語つて氣持の良いこと。
▼聽衆に義太夫通が殖いたこと。
▼客の寄りが早くて多く靜かなこと。
▼設備と客扱が能く行屆て居ること。

（富川町下車）目丁三町林區所本

文化倶樂部

電話本所六八二九番

（すまし致談相御に輕手は料席）

中野 痔座藥

定價一瓶 金五拾錢

イボ痔、肛門靡爛、脫肛痔、烈痔、痒痔、痔出血
痔瘻の藥によし

東京市小石川區關口町六五

發賣元 中野藥學實驗所

電話牛込一七二三番
振替東京三六五一六番

十月號（毎月一回一日發行）

定價
一部 金三十錢 郵稅二錢
六月分 金一圓八十錢 郵稅共
一年分 金三圓 郵稅共

廣告料
普通 一頁 金貳拾圓
特別 一頁 金三十圓

◎諸代は總て前金御拂込の事
◎なる可く振替に御送金の事
◎郵券代用は一割增但二錢切手の事

昭和五年十月十五日印刷納本
昭和五年十月十七日發行

東京市小石川區表町一〇九
編輯兼發行人 富取壽鹿

東京市日本橋區兜町五
印刷人 鈴木甚四郎

東京市日本橋區兜町五
印刷所 鈴木印刷所

東京市小石川區表町一〇九
發行所 太棹社
振替東京三一七八五番

◆歌舞伎座
◆新橋演舞場 御觀劇の節は

辨松食堂

歌舞伎座前

辨松總本店

電話銀座 二〇九番 四七二番

太棹（第拾八號）

（定價 金三十錢）